

審査論文の要旨

本論文は、筆者の永年にわたる京都府埋蔵文化財調査研究センターでの調査成果を基礎に、古代の窯業遺跡を中心とする研究としてとりまとめたものである。とりわけ、奈良山丘陵と呼ばれる京都府南端部から奈良県北端部での窯業生産、篠窯と呼ばれる亀岡市東部での窯業生産は、ともに平城京や平安京といった都城との関係が深い生産地であり、その生産の展開過程は、日本列島全体の窯業を考える上でも重要な鍵となる。これら宮都と関係する窯業生産を総合的に扱った研究はこれまでほとんどなく、発掘成果にもとづいて実証的にそれぞれの窯業生産地の動向を明らかにした点が、本論文のもっとも特筆すべき特徴となっている。

まず、第1章「奈良山丘陵の埴輪窯」では古墳時代の埴輪生産をとりあげている。木津川市上人ヶ平窯の調査事例の分析を中心に、5世紀代において土師器生産と関係をもちつつ埴輪生産が展開したことを明らかにし、当該地域での埴輪生産が、当時の王陵である佐紀古墳群の埴輪生産と関係しながら展開したことを述べている。埴輪窯の発見例が少ないなかで、5世紀代の埴輪生産の実態を探り、高槻市新池窯のような著名な例との比較をおこないながら、王陵を契機にはじまった埴輪生産が窯の近くの古墳にも供給するようになるという展開過程を跡づけており、埴輪生産の共通性をあぶり出している。

第2章では、「奈良山丘陵における瓦窯の展開」として、平城宮・京の都向けの瓦生産を跡づける。これまで調査された瓦窯跡を概観したのち、瓦窯構造を中心にその変遷を述べ、床面に畔をもつ平窯の成立過程について検討をおこなっている。飛鳥時代タイプの窖窯からの過渡的な様相を示す瓦窯構造を木津川市梅谷瓦窯の事例で示し、奈良時代前半にこの奈良山地域で工夫されて日本独特の有畦式平窯が成立することを明らかにした。これが、列島各地への国分寺の建立などを契機に広がっていくことにも言及している。

第3章「奈良山丘陵での瓦工房の復元」では、具体的な瓦生産の実態を明らかにすることを目的とし、工房跡の明らかになっている木津川市・上人ヶ平遺跡とさらに粘土採掘坑や斜路が発見されている鹿背山瓦窯を取り上げ、瓦生産の場を復元しようとしている。とりわけ上人ヶ平遺跡では大型の建物群が整然と並ぶ状況が確認されており、その性格が問題となっているが、同様の類例の検討から、瓦の乾燥や保管を目的とした施設と推測し、とくに大がかりな工房は、上人ヶ平遺跡と大和郡山市・西田中遺跡があり、前者が平城京、後者が藤原京のそれぞれ官営工房と言える施設であることに注目している。

第4章「奈良山丘陵の瓦陶兼業窯」では、同じ奈良山丘陵にありながら、瓦とともに須恵器も生産した瀬後谷瓦窯をとりあげ、生産瓦が平城宮ではなく京内の貴族の邸宅などに供給されていることを明らかにし、神亀5年の太政官奏で京内貴族の邸宅の瓦葺きが奨励されたことと関連するとした。また、この窯から出土している土製塔（瓦塔）についても言及し、9世紀に関東地方で流行する形式の原型であると位置づけている。

第5章「篠・須恵器窯の変遷」では、これまでの奈良山からは離れ、亀岡市篠窯跡の変遷やその意義を検討する。まず、そこで知られている窯について地区ごとに概観し、須恵器生産に加えて緑釉陶器生産、そして瓦生産が始まることを跡づけている。次に、生産された土器の分類と編年をおこない、大きく前半期と後半期で器種構成に違いがあることを

浮かび上がらせている。この篠窯出土土器の編年について、さらに平安京の出土資料との対比から実年代を推測する。篠窯を特色づけるものに小型三角窯があるが、その機能については諸説がある。本論文でも調査成果にもとづいてこの窯をとりあげ、緑釉陶器生産のために、窯構造に新たに加えた工夫により登場したとする考えを述べている。以上のように、篠窯についての課題をとりあげ、丁寧に検討を加えたのち、最後に篠窯の歴史的な位置づけに言及している。とくに篠窯の製品の流通状況の検討から、10世紀を中心に西日本に広く流通する状況が確認されている。高級食器である緑釉陶器が次第に民間に普及していく過程で、篠窯の製品の流通が大きな役割を果たしていることを明らかにした。

以上、奈良山丘陵における古墳時代と奈良時代の窯業生産、そして篠窯における奈良時代から平安時代の窯業生産を扱った本論文は、これまでそれぞれの地域の調査と研究をリードしてきた筆者のライフワークの結実とも言えるものである。すでに筆者の論が定説化していることもあり、両者の重要性は学界に周知されていると言える。本論文では、近年の研究動向もふまえ、体系的に総合化することも目的とし、都を支えた生産のあり方を浮かび上がらせることに成功している。